奈文研第 11 回東京講演会（2019/10/5）

「奈良の都、平城宮の謎を探る」

みなさまからいただいたご質問に対する回答

去る 10 月 5 日（土）に東京・有楽町朝日ホールにて開催いたしました、第 11 回奈文研東京講演会「奈良の都、平城宮の謎を探る」には、多数のみなさまにご来聴いただき、まことにありがとうございました。心よりお礼を申し上げます。

当日会場ではご質問にお答えする時間がありませんでしたので、質問票の形でご質問をお受けしました。多数のご質問をお寄せいただき、報告者一同感謝いたしております。

遅くなりましたが、下記に回答を記しますのでご覧ください。ご質問は、報告者順とし、最後にパネルディスカッション、及び全体に関わる事項を並べ、1 から 52 までの通し番号を付してあります。ご質問の文章は、その意図を生かしてアレンジしてありますことをご諒解ください。同じ趣旨のご質問にはまとめてお答えしている場合もあります。また、充分な回答のご用意のできなかったご質問もありますが、今後の検討課題ということでご諒解いただければ幸いです。

なお、これらの回答は、報告者の個人的見解に基づく文章をとりまとめたものであることをご諒解ください。

【内田和伸「平城宮の地はどうして選ばれたか？―平城遷都の詔における四禽と三山―」について】

Q1、朝鮮半島の影響が確認できるものはありますか？

A　新羅の都慶州ではそれを囲むように三山があったことから、藤原宮を囲む大和三山の見立てでは影響しているのかもしれませんが、はっきりと影響があると断言するのは難しいと思われます。

【今井晃樹「平城宮のモデルは唐の長安城か？」について】

Q2、平安京の内裏は、その初期には京域の北辺に接していなかったとする説がありますが、平城京においてはその可能性はないのでしょうか？

A　平安京の内裏ではなく大内裏（平安宮）のことでしょうか？　平安宮は平安京の中軸線上の北端に位置しています。その前の長岡京では長岡宮の北方には条坊道路の遺構が確認されており、京の北端とはいえません。平城宮の北方には条坊道路は確認されておらず、現状では大蔵省の倉庫群と松林苑があったと想定していますので、平城京の大内裏（平城宮）が平城京の北端に接していなかった可能性は考えにくいと思われます。

Q3、外朝・治朝・内朝という三朝区分が古代中国の都城の構成であって、外朝は皋門（都城南門）から中門（雉門）までの区間、治朝（先生が中朝と言われている部分）は中門（雉門）から路門までの区間、内朝は路門より北側というのが三朝の各領域だと思うのですが、

ご講演の中で、大明宮では丹鳳門（中門）含元殿までを外朝、平城宮では朱雀門から朝堂院南門までを外朝であると述べられていました。外朝は丹鳳門よりも南側、朱雀門よりも南側だと思うのですが、いかがでしょうか？

A　中国唐代の三朝制と「周礼」にいう天子五門制（皋門・雉門・庫門・応門・路門）との対比は諸説あります。私は唐代の人が考えた三朝制を基準にしています。その論拠は唐の開元 27 年（739）にできた『唐六典』です。この書によれば、宮城（太極宮）の外朝は承天門（宮城正門）、中朝は太極殿、内朝は両儀殿とあり、大明宮の正殿である含元殿は元日や冬至の儀礼を行い、紫宸殿は内朝の正殿である、と書いてあることから、中朝はその間の宣政殿となります。

外朝は元日と冬至の儀礼と饗宴の場ですから、平城宮におけるその場所は、朱雀門の南ではなく、大極殿院・中央区朝堂院と考えるのが妥当でしょう。ただし、日本では奈良時代末から始まる朔旦冬至の儀式を除くと、冬至の儀礼はおこないませんでした。

【桑田訓也「平城宮はどのように作られたのか？」について】

Q4、何故、未完成なのに急いで藤原京から遷都したのでしょうか？

Q5、平城宮が未完であっても遷都を決行した理由を教えてください。出土品から、その時代の状況はどのようにして推察されるのでしょうか？

A　ご質問の前提には、完成後に遷都するのが普通だ、というイメージがあるかと思いますが、それを裏付けるはっきりした証拠は、実はありません。発掘調査の成果は、完成には相当の年月がかかることを示しており、そのことは当時の人々も認識していたと思われます。むしろ未完なのに遷都したという見方から離れて、遷都後も造営を続けるのが普通だったと発想を切り換えるべきなのかも知れません。

Q6、「ナラ」とは何か？　古くは竹内理三が「たいら」なところとしていましたが、合点が行きません。あるとき韓国人に聞いたら、ナラって国ですよ、と言っていました。また、「羅城」の「羅」ではないかとも聞きました。後者が正解かと思いますが、いかがでしょうか？

A　「ナラ」の語源は、諸説あってはっきりしません。「たいら」は講演会当日にご紹介した説ですが、そのように説明されることが多いというだけで、それが正解というわけではありません。韓国語説はしばしば耳にしますが、羅城説は初めて聞きました。

Q7、何故、東区・中央区の二列の朝堂院を設けたのでしょうか？

A　藤原宮の朝堂院がもっていた２つの機能―①儀礼空間としての機能と②日常的な政務空間としての機能―を、平城宮では別々の区画に割り振ったため―①を中央区に、②を東区に―と考えられています。詳細については、昨年の講演会の記録集をご覧いただければ幸いです（渡辺晃宏「平城宮の歴史的位置」奈良文化財研究所編『藤原から平城へ　平城遷都の謎を解く』2019年9月刊）。

Q8、奈良という「地名」と「人名」は何らかの関係があるのでしょうか。？

A　関係があります。古代の地名と人名の一般的なあり方からすると、奈良というウジ名の氏族は、奈良という地域を本拠地としていた可能性が考えられます。奈良をウジ名に含む氏族として、奈良許知（己智）、楢曰佐、奈良真人、奈良忌寸、などが挙げられます。残念ながら、奈良という地域の具体的な範囲については、はっきりとはわかっていません。

Q9、藤原宮に東院はあったのでしょうか？　今まで読んだ本などでも、東院があったとの記述はなかったと記憶しています。そうすると、平城宮の東の張り出しは、中枢区画が２つに増えたことに加えて、東院もあるためということにはならないでしょうか？

A　平城宮の東院は、皇太子がいるときは皇太子の御所として、いないときは天皇の離宮として用いられた場所です。ご指摘のように、藤原宮では現在のところ、平城宮の東院に相当する施設は確認されていません。

平城宮の張り出し部に東院があるというのは、確かに重要な視点だと思います。東院相当の施設が藤原宮では宮の外にあったが、平城宮ではそれを宮内に取り込んだため東に張り出した、という説明も理論上はありえます。藤原宮・京の発掘調査の進展が待たれるところです。

10、第一次、第二次大極殿という呼び名は、改めた方が良いのでしょうか？

A　これについては、改めない方が良いと私たちは考えています。なぜなら大極殿は、時系列に沿って、中央区の建物（第一次大極殿）から東区の建物（第二次大極殿）へ機能が移っているからです。元日朝賀や外国使節の迎接などの際に天皇が出御した第一次大極殿（瓦葺礎石建物）は、恭仁京への遷都にともない移築されます。そのまま平城宮に戻ることはなく、跡地に再建されることもなく、平城還都後は、東区の掘立柱建物を礎石建ち瓦葺に建て直して、中央区で行っていた儀式の場として整備したとみられます。

Q11､木簡は木なのに奈良ではなぜ腐ってしまわないのでしょうか？　地下水が浅いのですか？

A　ご指摘のように、地下水が浅い（地下水位が高い）ためです。水に漬かった状態だと、酸素が少なく、木を分解するバクテリアが十分に活動できないため、木がくさらずに残ります。奈良以外でも、地下水の浅いところでは、木簡が出土する可能性があります。

Q12、なぜ木簡は単なる長方形ではなく、切りこみが入っていたり、三角にしたりするのでしょうか？

A　切り込みが入っているのは、そこに紐をかけて、荷物に括り付けるためです。ごくまれに、切り込みに紐（植物性の蔓ひも）が巻き付いたままの木簡が見つかることがあります。下部を三角などに尖らせる加工も、荷物に付けやすくするためと推測されています。例えば米の荷札の下端が尖っているのは、俵をしばった縄の間に挟み込みやすくするためと考えられます。

Q13、平城京造営の際の労働環境は整っていたのでしょうか？　それとも過酷な労働を強いられていたのでしょうか？

A　労働環境を具体的に示す資料は見つかっていません。ただ、『続日本紀』には「諸国役民、労於造都、奔亡猶多、雖禁不止」（諸国から来た労働者は、都を作るのに疲れて、逃亡する者が多く、禁止しても止まらない）という記述があります（和銅 4 年〈711〉9 月丙子条）。この記事からは、過酷な労働環境であったらしいことが推測されます。

Q14、平城宮を作るための労働力、支払いの食料他、経済的にどう賄ったのでしょうか？

A　労働力は、諸国の役所を通じて強制的に集められました。食料には、庸という税目で納められた米や塩を充てていました。発行したばかりの和同開珎（銅銭）で報酬を支払うことも、積極的に行われたと考えられています。

Q15、全国的に見たとき、奈良にどのくらい人口が集中していたのでしょうか？　また、税金を支払わない地域は何％くらいあったのでしょうか？　インフラが未発達な時代は税金を免れる人が多かったのではないでしょうか？

A　全国の人口は、奈良時代の初め頃で 400～500 万人、奈良時代末頃で 540～590 万人と推定されています。地域ごとの分布はデータがないためわかりません。平城京の人口は諸説ありますが、最近は 5～10 万人とみることが多いようです。そうだとすると、奈良時代初め頃には、全国の人口のうち 10～12％が、奈良時代末頃には 17～19％の人口が平城京に集まっていたことになります。

税は、山上憶良の貧窮問答歌にみられるように、厳しく取り立てられたようです。そこで本籍地を離れて逃亡する人がいましたが、見つかったら本籍地へ連れ戻されたり、逃げた先で税を取り立てられたりしました。平城宮からは「浮浪人」が納めた税物に付けられた荷札木簡が見つかっています。

Q16、古墳の分布と都城との関係性を教えてください。

A　平城宮・京の場合、古墳の分布と都城の範囲が重なっています。古墳の中には、都城造営にともなって破壊されたものと、そのまま残ったものがあります。例えば、平城宮の北には佐紀古墳群がありますが、その一部である市庭古墳（全長 253mの前方後円墳）は、平城宮と重なる前方部が削り取られ、後円部の一部が残りました。内裏から第二次大極殿にかけては、神明野古墳（全長 114mの前方後円墳）がありましたが、平城宮造営にともない削平されたことが発掘調査によってわかっています。一方、宝来山古墳（全長 227m、垂仁天皇陵）のように、平城京内にそのまま残っているものもあります。

Q17、木簡の文字はどういう教育を受けた者が書き手だったのでしょうか？

A　木簡の書き手は、主に都もしくは地方の役人です。都の大学や地方の国学といった教育機関、あるいは有力者の私宅などで中国の書物に触れ、それらを通じて漢字・漢文の読み書きを学んだ者が書き手とみられます。

Q18、木簡が見つかったのでまだ建物等たてられていなかったとの事ですが、発見された木簡はまとまって発掘されたのでしょうか？　要はゴミ捨て場的な場所だったのですか？また、木簡みつかる＝建物たてられていない、の部分をもう少しわかりやすく教えてください。

A　ご質問の文脈で紹介した木簡２点のうち､伊勢国の荷札はまとまった状態で見つかったものではありません。丹波国の荷札は、建築用材の破片やはつり屑、檜皮などとともに出土しています。伊勢国の荷札は整地土に混ざっていたもので、ゴミ捨て場的な場所ではありません。丹波国の荷札は造営前の谷地形に他の遺物とともに堆積していたもので、ゴミ捨て場的な場所かとどうかにわかに判断できません。

木簡みつかる＝建物たてられていない、について補足します。木簡が整地土の中からみつかった場合、その木簡が捨てられた時点では、まだ整地土の上に建物はたっていません。木簡に書かれている年紀は、捨てられた時点より前のものですから、木簡に書かれている年には、まだ建物はたっていないことになる、という趣旨です。

Q19、平城宮の完成まで 10 数年かかったとの事、想像とは違っていました。それでは何故、70 数年で再び遷都したのでしょうか？　少なくとも数百年は使える都を捨てたのでしょうか？　なぞは深まるばかりです。平城宮内の土壌汚染の調査予定はありますか？

A　遷都の契機は、その時々の政治的事情によります。平城から長岡への遷都は、桓武天皇が自身の権力基盤を強化するために行なった、というのが有力な理解かと思います。それがたまたま平城遷都後 70 数年目にあたっていた、ということです。

　当時の人にとって、都は比較的短期間で動きうるものでした。「70 数年」の間も、ずっと平城京にいた訳ではなく、恭仁京・紫香楽宮・難波京と動いた時期があります。「70 数年」や「数百年」といった長いスパンで都を捉える発想は、そもそも乏しかったと思われます。

　平城宮内の土壌汚染の調査予定は、とくにありません。

Q20、中心が２つのラインになったので東に拡張したというのには納得ですが、そのまま短冊が右にふえたのではなく、右下のスミが欠けている理由がよくわかりません。なぜ、右下のスミは拡張されなかったのでしょうか？

→**Q24** をご覧ください。

Q21、平城京と平城宮の張り出しの形が同じ名のは何故でしょうか？

A　平城京と平城宮は、ともに東に張り出す形をしています。張り出すことになった事情は異なりますが、方角が同じ東である理由をあえて推測するならば、東が高く西が低い地形のため、建物を建てるのにより適した東の土地を確保しようとする意識が働いた、といえるかも知れません。

Q22、平城宮の 2 つの儀式等を行う施設（朝堂院）のうち、中国式の施設が後から造られたそうですが、その間の外交儀式はどこで行われたのでしょうか？　先に造った日本式の施設で行われたのでしょうか？　この場合、何故 2 つ目の中国式の施設が必要だったのでし

ょうか？　外交相手は中国が主だと思います。先に中国式を造る方が、中国外交には有利ではないでしょうか？　東区の朝堂院の方が古いとおっしゃっていたように思いますが、私の聞き違いでしょうか？

A　平城遷都後、初めて記録に見える外国使節は、和銅 7 年（714）11 月から翌年の 3 月まで滞在した新羅使です。第一次大極殿の初見である和銅 8 年（715）の元日朝賀に参加したことはみえませんが、正月 16 日に「中門」で宴会に、17 日に「南闈」で大射という儀礼に参加しています。

平城遷都頃の日本の外交相手は、唐よりも新羅が主で、数年に一度、使節の往来がありました。唐の外交使節は基本的に日本に来ることはなく、日本から唐に出向いていました（遣唐使）。したがって、造営の進捗状況は、中国外交の有利不利には結びつかなかったと考えられます。

朝堂院は、確かに東区の方が古いとお話ししました。発掘調査の成果によるものです。中央区は外交面では数年に一度のイベント用、東区は日常業務用、すぐに必要なのはどちらか・・・と考えれば、造営の優先順位が理解しやすいのではないかと思います。

【小田裕樹「平城宮の東院とはどういう施設か？」について】

Q23、掘立柱建物について、「日本古来」と説明されていました。しかし、掘立柱建物も、そもそも大陸から来ているものであり、「日本古来」とすることに抵抗を感じました。講師が断言される根拠は何でしょうか？

A　掘立柱建物とは、地面を掘った穴の中に柱の根元を入れ、その周りを埋め戻して柱を固定した構造の建物のことです。この掘立柱の構造自体は縄文時代からありますので、大陸から来ているとは断言できません。私の講演の中では、東院地区の建物の特徴として、複数時期の掘立柱建物が多数存在することを挙げました。これは同じ平城宮内の第一次大極殿院・中央区朝堂院や奈良時代後半の東区朝堂院が瓦葺きの礎石建物で構成されることとは対照的です。

日本では瓦葺き・礎石建物は 588 年創建の飛鳥寺で初めて採用されました。これは大陸から来た新たな建物構造といえます。この瓦葺き・礎石建物が宮殿内の多くの施設に採用されるのは平城宮の一つ前の藤原宮からです。平城宮の時代でも瓦葺き・礎石建物は新しいタイプの建物で、掘立柱建物は「伝統的」「日本古来」の建物と意識されていたと考えることができるのではないでしょうか。

Q24、東院の右に張り出している部分は、なぜ一番下のところが空いていて、長方形でなく、くびれができているのでしょうか？

A　平城宮東院地区南方の四坪分が空いている理由として、平城宮の特徴的な中枢区画の構造と平城京のメーンストリートである朱雀大路との関連から説明されています。

遷都当初の平城宮では大極殿や朝堂院からなる中枢区画が朱雀門北と壬生門北の２か所に存在していました。これは藤原宮で大極殿や朝堂院が中央に存在することとの大きな違いです。平城宮ではこの２つの中枢区画を設けた結果、宮内に入るべき官衙区画などを東側に拡張したと考えられています。しかし、この東側に区画を拡張した平城宮では、宮の

中軸線上にあるべき朱雀門の位置が、遷都以前からの下ツ道を拡幅し、平城京のメーンストリートとした朱雀大路とずれてしまうという問題が生じてしまいます。

この矛盾を解決する方法として、平城宮の正門である朱雀門を朱雀大路の正面に置き、平城宮南面の東西対称性を維持するため、あえて東院地区南方の四坪分を切り欠いたと考えられています（渡辺晃宏 2019「平城宮の歴史的位置」『藤原から平城へ　平城遷都の謎を解く』奈良文化財研究所）。ですから、この四坪分は、本来平城宮に含まれてもおかしくなかった場所と言えそうです。

ただし、東院地区南方の四坪分（東院南方遺跡と呼んでいます）は、発掘調査があまりおこなわれていないため、この四坪内にどのような施設があり、どのような使われ方をして、どのような性格であったのかについてはよくわかっておらず、私たち研究員の間でも議論があります。今後の調査の進展で、この謎が解明できるかもしれませんね。

Q25、新たな井戸が見つかったとのことで、平城宮は内裏以外にも台所とされる場所があったという事ですが、それに関する木簡は発見されているのでしょうか？

A　平城宮には内裏以外にも台所施設（厨（くりや）と呼んでいます）がありました。平城宮内から出土する墨書土器には「兵部厨」など役所の名前に厨を記す例があり、規模の大小はともかく、各役所に台所施設が付属していたようです。

東院地区で見つかった新たな井戸は平城宮内最大級の井戸で、その規模は内裏地区の井戸に匹敵します。これは内裏に準じるような規模の厨が東院地区にも所在したことを示していると考えられます。

ちなみに井戸からは木簡も出土しています。食事や施設の詳細がわかる木簡はありませんでしたが、天平宝字３年（759）とみられる年紀のある荷札木簡が出土しており、この井戸が使われていた時期を示しています。759 年頃の東院地区には孝謙天皇の時代に造営された「東院」と呼ばれる宮殿があり、天皇と貴族が宴を開いていたことがわかります。この井戸は「東院」で宴がおこなわれた際の食事を準備する施設の一部であった可能性が高いと考えられます。

【神野恵「施釉瓦塼・陶器の出土は何を示すか？」について】

Q26、奈良三彩などの施釉陶器が地方の仏教関連遺跡・遺構から出土することがありますが、その意義や背景について教えてください。

A　日本全体での出土状況を見渡した場合、集落、官衙、寺院跡など遺跡の性格を問わず、小壺の出土が多い傾向にあります。奈良三彩はとくに小壺を中心に祭祀具として、仏具として広まっていった可能性が高いと考えられます。仏教関連の遺跡自体が、やはり聖武天皇の国分寺、国分尼寺の建立と関わるとみられますので、奈良三彩もその頃に盛んに作られたことを考えると、その普及の背景には国分寺、国分尼寺の建立が大きな要因の一つであったのでしょう。

Q27、奈良三彩の製造場所はどこだったのでしょうか？

A　奈良三彩を焼成したと考えられる窯は、これまで京都で平安時代初頭の窯が１例みつか

っていますが、奈良時代の窯は未発見です。しかし、昨年の夏に法華寺の旧境内でおこなった発掘調査で奈良三彩の焼成に使われたとみられるトチン（　）が１点出土しました。奈良三彩の焼成温度はそれほど高くありませんから、地上式の窯で十分に焼成できた可能性が高いと考えています。つまり、地上に作った窯で焼いて、それは製造が終われば撤去されるでしょうから、遺構として残らないものが多かったのではないかと考えています。この奈良三彩は地方で出土する場合も、少数ですから、地方で生産をしていた可能性は低く、平城京内もしくは平城京近郊で作られた製品が、地方に運ばれたのだろうと考えています。

Q28、土師器や須恵器、三大古窯との関連はあるのでしょうか？

A　三大古窯とは陶邑窯（大阪府堺市）、猿投窯（愛知県名古屋市）、渥美・湖西窯（愛知県田原市・豊橋市・静岡県湖西市）でしょうか。これらの生産地は古代の須恵器生産地として有名です。また、渥美・湖西窯の代わりに牛頸窯（福岡県大野城市）にあてる方もいるようです。牛頸窯も古代の主要な須恵器生産窯で、その製品はおもに大宰府に納められました。須恵器は比較的高い温度で焼成しますので、良質な粘土を必要としますが、土師器は野焼き程度の温度で焼くことができるため、縄文土器や弥生土器のように、村単位や集落単位でも作ることできました。三大古窯との関連性は希薄と言えるでしょう。

Q29、奈良三彩が仏具（供え物）であれば、食器など他の陶器が平城京では日常生活で使われていたのでしょうか？

A　平城京で日常生活に用いられていた食器は、須恵器や土師器といった土器・陶磁器が主体だったとみられます。それよりも貴重な食器として、金属器や漆器なども使われていたとみられます。実際に、発掘調査で金属器や漆器などの食器も出土しています。

Q30、一般人も当時は陶器を使っていたのでしょうか？

A　ご質問の陶器は須恵器のことでしょうか？須恵器の場合、一般人や平民も、須恵器という陶器を使っていただろうとお答えすることができます。平城京の南側の下級官人や平民、商人などが住んでいたとみられる小規模宅地などでも須恵器が出土します。奈良時代の物価がわかる資料をみると、土師器（＝土器）と須恵器（＝陶器）は同じくらいの値段であったことがわかっています。ご質問の陶器を奈良三彩などの施釉陶器と理解した場合、奈良三彩は大変貴重なものだったと思われますので、一般の人や平民が奈良三彩を使うことは難しかったと考えられます。

Q31、奈良三彩が平安時代に衰退したとのことですが、他の地域の釉薬を使用した焼き物との技術的連がりはあるのでしょうか？

A　奈良三彩が衰退すると同時に、緑釉一色を用いた緑釉陶器が流行します。はじめは平安京近郊で作られますが、のちに尾張猿投窯で大量生産されるようになります。この緑釉陶器生産は、基本的に奈良三彩の製作技術を継承していると考えられます。緑釉陶器の量産化が始まると鉛釉ではなく灰釉を用いたと陶器生産も、尾張猿投窯を中心に盛んになりますが、これも緑釉陶器と技術的には関連が深いと考えられていますから、中世の施釉陶

器へと、奈良三彩の技術は受け継がれていくと言えます。

Q32、平城宮内で仏事が盛んに行われたことは驚きです。神事も仏事も同じ場所で執り行われたのでしょうか？　今の私達の家にある仏壇での供養と同じなのでしょうか？　天皇と仏教・寺との間の距離（心の）がそれほど近接な時代があったのでしょうか？

A　平城宮のなかの仏殿は、おっしゃる通り、家の仏壇のイメージに近いですね。現代の家の仏壇は、亡くなった家族の菩提を弔う一面が強いと思いますが、奈良時代の仏教は、むしろ国家の安泰を願ったり、悔過といって自分の罪を清めたりする役割が強かったと思います。『日本書紀』皇極天皇元年（642）条には、雨乞いのために神事をおこなったが効果がなかったので、仏事をおこなったところ雨が降ったとするような記述があります。７世紀には神と仏は対立するものだったことがわかります。奈良時代の御斎会に注目した場合、この対立の図式が大きく変化していることがわかります。神事では神＝天皇ですが、御斎会の仏事は、この神＝天皇が鎮座する高御座に仏を安置することはきわめて示唆的です。この点を深く考えると、むしろ同じ場所で神事と仏事をおこなうことに意味があるのかもしれません。奈良時代の聖武天皇や光明皇后、孝謙天皇（称徳天皇）は、遣唐留学僧などから国家鎮護のため、熱心に仏教を学んだに違いありません。平城宮のなかで、天皇がお住まいの近くに仏教施設を置かれた意味は、天皇と仏教の関係を端的に物語っているといえます。

【福嶋啓人「平城宮で即位した天皇の大嘗宮は？」について】

Q33、大嘗宮の立地として朝堂院というのは格別の場所という感じではとらえにくいのですが、大嘗祭のような重要で神聖な儀式がそのような場所で行われていたということをどう解釈すればよいのでしょうか？

A　奈良時代の朝堂院は平城宮内でも格式の高い空間です。奈良時代前半の平城宮では、大極殿の南面に位置する中央区朝堂院が儀式や饗宴の場、東区朝堂院は朝政の場という機能をもち、奈良時代後半では、大極殿が東区に移転することから、中央区朝堂院は主に饗宴の場、東区朝堂院は儀式や朝政の場として機能していました。朝堂院の朝庭は平城宮内でも、奈良時代前半の第一次大極殿院は別として、最も格式の高い広場空間です。

ただ大嘗祭については、上記の朝堂院の機能と比べると、奈良時代前半でも東区朝堂院で営まれ、また奈良時代後半の称徳天皇は中央区朝堂院で執り行うなど、他の儀式とは異なります。そのひとつの解釈として、天皇の住まいと朝堂院との位置関係が挙げられます。

天皇の住まう内裏との位置関係をみると、称徳天皇の西宮をのぞき、内裏は東区朝堂院の北方に位置しています。そのため、内裏と近い東区朝堂院で大嘗祭が執り行われたと考えることができます。奈良時代後半の称徳天皇の住まう西宮は、第一次大極殿跡地に築かれるため、中央区朝堂院で大嘗祭が営まれたと考えることができます。つまり、平城宮で営まれた大嘗祭については、内裏との位置関係によって、朝堂院が大嘗祭の場としてふさわしいとみることができます。

では、飛鳥時代の大嘗祭はどこで営まれたのかが気になるところですが、現在のところわかっていません。しかしながら、平城宮での大嘗宮の形式が平安宮でも継承されたよう

に、飛鳥時代の大嘗祭からも、奈良時代の大嘗祭へと継承されていた部分は多々あるのではないかと推察できます。その場合、飛鳥時代でも朝堂院もしくはそれに相当するような空間で大嘗祭は執り行われていたと推定でき、飛鳥時代から朝堂院という空間が大嘗祭をおこなう重要な場であり、ふさわしい場であると当時の人々が考えていたといえるでしょう。今後発掘調査によって、未確認の飛鳥時代の大嘗宮の遺構が発見されれば、大嘗祭の挙行される場のルーツがより明確になることと思います。

Q34、プロジェクトに参加すると、奈文研の方に説明してもらえますか？

A　奈文研の職員が大嘗宮について説明をおこなう予定はございませんが、配布するリーフレット内で、平城宮で発見された大嘗宮遺構について解説しています。リーフレットは、令和元年 11 月 9 日（土）に奈良文化財研究所で開催される第 125 回公開講演会にて先行配布する予定です。その後は、平城宮跡資料館等にて入手可能です。

古代即位関連儀礼の歴史環境体験プログラムでは、大嘗宮リーフレット作成のほかに、第一次大極殿院で確認されている幢旗遺構の AR 体験会を実施いたします。日時は令和元年 11 月 9 日（土）で、先述の第 125 回公開講演会にて当プロジェクトの企画についてミニ講演がおこなわれたのち、15 時 30 より第一次大極殿にて体験会を実施いたします。

Q35、奈良時代でも大嘗祭は深夜にやっていたのでしょうか？

A　大嘗祭を執りおこなう時間については、奈良時代の儀式次第が残されていないため、実情は不明です。平安時代では、『儀式』に夕刻から明け方までの間でおこなっていたことが記されています。あくまで推論ではありますが、大嘗宮の建物や配置の形式が奈良時代から平安時代まで踏襲されていることを考えれば、大嘗祭の儀式次第もおおよそ踏襲されていると考えることができ、平安時代に夕刻から明け方にかけておこなっていた大嘗祭は、奈良時代以前より継承されたものといえます。

Q36、建設費用はある程度必要だったのでしょうか？

A　奈良時代の大嘗祭に関する具体的な儀式内容や大嘗宮の建設過程および費用はわかりません。大嘗宮の規模や配置、各建物の形式は、大嘗宮が建てられた場所による敷地の制約だけでなく、各時代の財政や社会状況によっても変化していました。その時代ごとに建設費用もまた変化していたといえます。

平安時代の『儀式』を参考にすると、大嘗宮を建設するために、まず卜定によって斎国として悠紀国と主基国（悠紀は東日本、主基は西日本から）を選定します。選ばれた双方の国から建築資材の伐り出しがおこなわれ、都に運搬されました。大嘗宮の建設には工人も必要になります。現代の感覚からしても、大嘗宮の建設にはある程度費用が生じるといえるでしょう。

ここからはあくまで現代的な感覚になりますが、平安時代初頭における大嘗宮の各建物の延べ床面積は、正殿と膳屋が 57.6 ㎡、臼屋が 14.4 ㎡、御厠が 7.2 ㎡、神服柏棚が 6.8 ㎡で、悠紀院と主基院の両方に建てるので、合計した総延床面積は 287 ㎡になります（『儀式』記載の規模による。1 尺=0.3m で換算）。坪数に変換すると 87 坪で、各建物は平屋です。工期は 5 日間でしたので、仮設の建物とはいえ、建設に従事する工人もそれなりに必

要になるといえるでしょう。祭儀後、大嘗宮は撤去されるので、撤去にも人数が必要になります。一概に現代と比較することはできませんが、一般の木造住宅で同規模の建物を建てる場合でも、ある程度費用がかかることが想像できるかと思います。

Q37、孝謙天皇の「南薬園新宮」についてもう少し詳しく教えてください。

A　「薬園宮」とは平城京近郊にあった離宮で、薬草園であったとみられます。平安京から類推すると、都の北にあった典薬寮薬園を北薬園とし、これに対する南薬園のことを指すと考えられます。孝謙天皇が大嘗祭を営んだ南薬園新宮は、この「南薬園」宮に新造された宮と解釈できますが、この新宮の中に大嘗宮を建設したのか、またこの新宮自体が大嘗宮を意味するのかはわかりません。「南薬園」宮は中世の東大寺領大和国薬園荘に受け継がれ、現在の奈良県大和郡山市にある郡山城東の市街地付近に比定されています。ちなみに、大和郡山市材木町に所在する薬園八幡神社は、奈良時代の「南薬園」宮や中世の薬園荘にゆかりのある神社とされています。

参考文献：吉川真司「平城京南郊の古代荘園」『東大寺の新研究 2　歴史の中の東大寺』、法蔵館、2017。

【パネルディスカッション「まだまだある平城宮の謎」について　ほか】

Q38、パネルディスカッションにて第一次大極殿南門の南で見つかっている幢幡遺構のお話しがありましたが、平城京のその遺構では、烏形幢穴が第一次大極殿院の中軸線上にあるとされています。しかし、内田さんが藤原京大極殿院南門の南で出土の烏形幢穴について書かれている論文では、藤原宮中軸線と一致していません。両者の違いについてはなぜでしょうか？

A　第一次大極殿前では、階段下から 10m 程ですからずれれば見た目でも確認できるくらいの距離です。ところが藤原宮大極殿院南門前で見つかっている烏形幢は階段下から約 20m で、距離は倍あります。基本的には中軸線上に配置しようとしたと思われますが、なぜか施工の精度が悪く、東へ寄ってしまっています。両者の違いは施工の精度ということでしょう。

Q39、「宮」なるものが最初に出来たのはいつ頃でしょうか？　天皇誕生（？）との関係はあるのでしょうか？

A　『古事記』や『日本書紀』には各天皇がそれぞれ宮を営んだことが見えますので、ヤマト王権の大王が、住まいであり支配拠点でもある宮を造っていたのは間違いないでしょう。しかし、ある程度実態の記述があり、遺跡として確認されている宮ということになると、推古天皇の豊浦宮や小墾田宮あたりからということになるでしょう。中でも小墾田宮は、『日本書紀』にその構造についての記述があり、内裏や朝堂などのちの宮城の基本構造が出来上がっていたことがうかがえ注目されます。また、従来天皇（大王）が代わるたびに新たに宮を造営したというイメージがありましたが、舒明天皇の飛鳥岡本宮、皇極天皇の飛鳥板葺宮、斉明天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮が同じ場所で継続して営まれていたことが発掘調査で明らかになり、少なくともこの時代以降は宮のイメージ

も変わってきています。「天皇」号の成立については天武朝とする見方がある一方、推古朝まで遡るのではないかという意見もあます。後者とすれば、時期は重なることになります。

Q40、最近陰陽道（師）が話題にのぼっていますが、彼らは平城宮の造営などにどのような役割や影響を与えたのでしょうか？

A　陰陽師は天武天皇 13 年（684）、畿内に派遣され宮都の候補地を探索させられています。藤原宮大極殿院東門の発掘調査では陰陽五行説に関連する文字を記した皿が見つかり、造営に関係したと見られます。桓武天皇は天応二年（782）亡父光仁天皇陵改葬準備のため陰陽を解する者に陵の地を見させていますし、延暦三年（784）には長岡の地を視察させています。平城京の造営においては、『続日本紀』などで直接的な記述はみられませんが、前後の時代での陰陽師・陰陽寮が関わっていますし、養老律令によって職掌などは確認できますから一定の役割はあったと考えられます。むしろ、淳仁天皇の天平宝字二年（758）8 月 25 日の詔では「陰陽寮は陰陽暦数、国家の重みする所、この大事を記す。故に改めて大史局とす。」としていますから、その役割は少なくなかったと考えられます。影響について具体的に示すのは難しいと思います。

Q41、奈良盆地の三本の幹線道路について、古代史の先生方は既にあったことを前提に話されますが、等間隔でしかも平行に、３本が、何故、いつ作られたのか教えてください。

A　明確な建設年代は不詳ですが、平城宮跡内でも下ツ道（の側溝）が見つかっており、また、朱雀大路は下ツ道を拡幅して敷設されました。したがって、これらの幹線道路の敷設は、少なくとも平城宮造営以前、恐らくは 7 世紀段階に遡るのは確実で、乙巳の変に始まる律令国家建設の歩みの中に位置付けられるとみられますが、下ツ道は大和国の添上郡と添下郡の郡境にもなっており、両郡で条里の区画がずれていることから、口分田の班田収授の実施に伴う条里制の施行よりも前に遡る可能性も考えられます。その後、近江への遷都や、壬申の乱の際の大海人皇子の軍勢の移動にもこれら三道が用いられたとみられます。また、藤原宮の造営資材を琵琶湖東南の田上山から運ぶ際にも、木津川を遡って泉津（木津）で陸揚げしたあと、奈良山を越えて陸路をこれら大和盆地を縦断する幹線道路を利用して運んだようです。

Q42、近鉄奈良線の線路下は手つかずと思われます。将来、地下化されたり、付け替えられたりする可能性はないのでしょうか？　是非、この場所も発掘して欲しいものです。質問というより希望です。

Q43、近鉄の線路はなんとかならないのでしょうか？

A　近鉄奈良線は盛土の上に敷設されているとみられますので、その下に遺跡はそのまま残っているはずです。平城宮跡の保存にとって、近鉄線をはじめ、宮内を横断する道路の取り扱いは大きな課題です。平城宮跡にとってだけ考えると、これらを外側に移設するのが望ましいのですが、平城宮跡の周囲には平城京跡や松林苑跡など広大な遺跡が展開していますので、線路の移設は容易なことではありません。もちろん、おっしゃるように線路下部分も発掘調査できるに越したことはありませんが、線路下部分を残したままでも遺跡の

概要はつかめます。例えば、東区朝堂院南方の兵部省・式部省・神祇官は近鉄線によって分断され、線路下部分は未発掘ですが、役所の構造はほぼ把握できています。いずれは線路下の発掘調査も行いたいと思いますが､私たちだけではどうすることもできない事柄で、現時点では将来的な課題と考えざるを得ないのが実状です。

Q44、説明の中で「尺」という単位がよく使われているのですが、これはやはり当時使われていた単位で表す方が、メートル表示よりわかりやすいためと考えていいのでしょうか？

A　当時の長さは、全て丈、尺、寸、分を単位として測られていました。1 丈＝10 尺、1 尺＝10 寸、1 寸＝1 分という 10 進法で、1 尺は約 30 ㎝（時代により長さに伸び縮みがあります）ですので、建物の大きさを測る最も身近な単位でした。そのため、発掘調査成果の説明では、例えば建物の柱間（柱と柱の間の距離）をいう場合に「柱間 2.4m」ではなく、「柱間 8 尺」と書くわけです。

しかし、「尺」はなかなか現代の生活の中ではイメージしにくい単位です。そこで、前述の例では、単に「柱間 8 尺」と書くのではなく、柱間約 2.4m（8 尺）のような形で書く工夫もしています。「尺」の実寸には時代による変化がありますし、計測の誤差もあります。実際の計測値を何尺と理解するかはあくまでも解釈である点には注意が必要です。

Q45、奈文研では何人位の研究員がいますか？　男女比率や年代分布はどう構成されていますか？　忙しいと思いますが、夜遅くまで研究していますか？

A　2019 年 10 月 1 日現在で、研究系の常勤職員が所長以下 62 名、アソシエイト・フェロー（任期付き研究員）が 21 名となっています。女性の割合は研究系全体で約 3 割です。年齢構成は、40 代が一番多く、次いで 30 代、50 代、20 代の順になっています。

私たちの仕事は大変息の長い仕事で、基本的に終わりがある仕事ではありません。長期・短期のスパンで目標を立ててそれを実行していくことの繰り返しです。おっしゃるように、遅くまで仕事に勤しんでいる研究員もいます。発掘調査では、その日の成果はその日のうちにまとめておかないと次の日の調査方針が定まりません。また、現地説明会や展覧会の開会が近付くと、てんやわんやの日々が続くこともしばしばです。

Q46、発掘現場は永久保存復元できないのでしょうか？　テーマパーク化して歴史の教材になると良いです。

A　発掘現場をそのままの状態で多くの方にご覧いただきたいという思いはあります。平城宮跡においても、遺構展示館において、検出した遺構を覆屋を建てて露出展示しています。しかし、その維持には多くの労力を要し、遺構保存の面でも課題が残ります。

そのため、通常は発掘調査が終わると、遺構面（当時の地面）に砂をまいて遺構を養生した上で、元の土で埋め戻して遺構を保護することにしています。最終的にはさらに盛土を行って、遺構面から一定の保護層を確保して遺構を傷めないように配慮しながら、発掘調査成果に基づく遺構の表示を行います。発掘調査に基づく復元建物の建設には、莫大な予算が必要となるため限定的にしか行えません。また、平城宮跡は特別史跡であり、またユネスコの世界遺産にも指定された場所です。想像で建物を建てるわけにはいきません。

平城宮跡は、一見すると何もない原っぱのように見えるかも知れませんが、来訪者のみなさまには 1,200 年以上も前にここにあった平城宮の往時の姿を、自由にイメージしていただきながら、過去に思いを馳せていただけたらと思います。

Q47、土地台帳を遡って、土地所有者の変遷から、どの様に土地が利用されてきたのかも調べると面白いのではないでしょうか？

A　ご指摘ありがとうございます。1960 年代に国有化進められるまでは、平城宮跡の大半は田圃や畑として耕作される民有地でした。平城宮だった場所がどのような過程を経て田畑に姿を変えたのかはわかっていませんし、土地台帳でどこまで遡れるかはわかりませんが、土地の歴史を考えるのは面白い視点だと思います。土地の名にも平城宮の痕跡は残っています。平城宮内の小字名には、大宮、東大宮、神明野、大り宮など、ここが宮城だったことを示すと思われるものが散見します。土地の名は土地の歴史そのものともいえるわけで、大切にしていきたいと思います。

Q48、昨年度の「藤原京から平城京へ―平城遷都」の遷都理由の要点を教えてください。16 年の短命の理由も教えてください。

Q49、都が遷都する理由は、天災、病気、権力争いなどあると思いますが、どのような背景で引越したのか、素人の人にも向けた解説を前段でお願いしたかったです。

A　遷都の理由をさまざまに考えられ、ひとことで結論をまとめるのは困難ですが、大宝の遣唐使がもたらした唐（当時は則天武后の時代で周といいました）の都、長安の新しい情報が決め手になったのは確かでしょう。南が高い場所に立地し、都の中央のしかも低湿な場所に宮城を置く藤原京の構造的欠陥を打開するために、盆地北端の北が高い場所に立地し、その北端に宮城を置く平城京を造営する決断をし、遷都を断行したと考えるわけです。

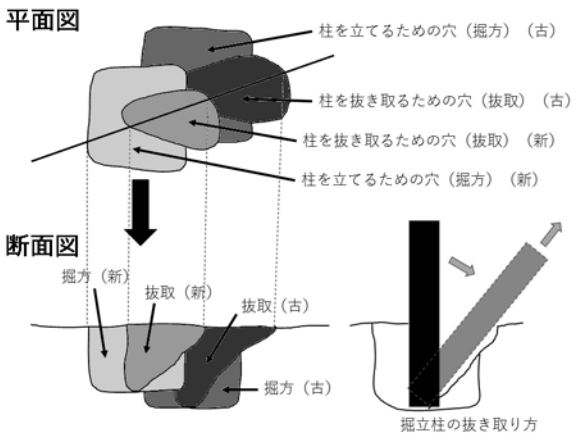
　都を遷すには、天災、病気、権力争いといった理由も考えられますが、藤原から平城への遷都の場合には、都や宮城の立地や環境という、国造りの根本において直面した理念的かつ現実的な課題への対応という側面が大きかったのです。その点では、後の時代の恭仁京、長岡京、平安京への遷都とはかなり事情が異なるといってよいでしょう。

　平城遷都の理由については、6 人の報告者が多面的に論じていますので、昨年の講演会の報告集をご覧いただければ幸いです（奈良文化財研究所編『藤原から平城へ　平城遷都の謎を解く』2019 年 9 月刊）

Q50、掘立柱が重なって発掘されると考えられますが、その年代順はどうやって判別するのでしょうか？

A　土の違い（色、かたさ、粒の大きさ、含まれている遺物など）を見つけて線を引くのが発掘調査の基本中の基本です。掘立柱の柱穴の重複関係でも基本は同じです。地面に穴の形が完全に残っている方が新しいと判断します。迷うことも多いですし、人間の判断ですので間違うこともあります。そこでさらに念押しが必要と考える場合には、断ち割りといって重複している穴を半截して断面での重複関係を調べる作業を行います。断ち割る場所は、重複関係が最も効率的に把握できる位置を考えて決定します。3 つ以上の穴が重なっている場合も稀ではありませんが、考え方は同じです。なお、掘立柱の柱穴では、柱を立

てるときの穴（掘方：ほりかた）と、柱を抜き取る時の穴（抜取：ぬきとり）がペアになっているのが普通です。掘方と抜取では、当然掘方より抜取の方が新しくなります。（図参照）



重複する掘立柱の柱穴（模式図）

Q51、なぜ70年余りの間にたくさんの建物を建て替えたのですか？

A　平城宮の建物の大半は、掘立柱といって、地面に穴を掘って柱を直接埋め込む方式で建てられています。掘立柱は地下水の影響を受けて腐りやすいため、寿命は一般に20年くらいだろうといわれています。しかし、平城宮では70年余りの間に何回もの建て替えを行っている場所がたくさんあります。これは寿命のためというより、宮城の構造そのものや、役所の配置の変更が頻繁に行われたためと考えられます。

奈良時代は、中国にならった律令に基づく国政運営を、日本実情に合うように改変しながら定着させていった時代です。頻繁な建て替えは、それにフレキシブルに対応していった結果といえそうです。

Q52、平城宮の現在の土地利用状況を教えてください。

A　かつては大半が水田や畑として利用されていましたが､現在では特別史跡平城宮跡として指定されている約130ヘクタールのうち、8割以上が国有化されています。一方、北部と東部には多くの民有地があり、多くの方が居住しておられます。また、平城宮跡西北部の民有地には、特別史跡に指定されていない地域もあります。

一方、平城宮北方の松林苑推定地は、全て民有地であり、発掘調査は開発の事前調査として実施される場合がほとんどです。状況は平城京内と基本的に同じです。